

# 國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

## 吉川『三国志』における非漢族人物像に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード: 『三国志演義』, 吉川『三国志』, 非漢族, 人物像 作成者: 姜, 涓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001643">https://doi.org/10.57529/0002001643</a>

# 吉川『三国志』における非漢族人物像に関する一考察

## A Study on the Depiction of Non-Han Characters in Yoshikawa's "Sangokushi"

姜 涓

キーワード：『三国志演義』 吉川『三国志』 非漢族 人物像

**Key Words:** "Sanguozhi Yanyi" Yoshikawa's "Sangokushi" non-Han nationality character depiction

### 要旨

中国の長編白話小説『三国志通俗演義』（以下『三国志演義』）は、日本の慶長年間（1596～1615年）に伝えられて以来、多くの翻訳や翻案が行われ、特に吉川英治の『三国志』が大変な人気を博している。三国の物語は漢族を中心に描かれているが、非漢族の人物も登場する。しかし、吉川『三国志』に関する先行研究では非漢族の人物像に焦点を当てたものは見当たらない。

そのため、本稿では、『三国志演義』と吉川『三国志』に登場する非漢族の人物を特定し、そして蛮王孟獲、祝融夫人、木鹿大王の人物像を比較分析した。その結果、『三国志演義』には24名、吉川『三国志』には20名の非漢族人物が登場することが分かった。また、両作品における人物像の分析から、吉川『三国志』では非漢族人物に新たな性格が追加されることや、原作のイメージが強調されることがあり、肯定的な方向で創作されていることが明らかとなった。これにより、吉川英治が非漢族に対して積極的な態度を持っていたことが伺える。ただし、非漢族の人物像を肯定的に再構築した意図については未解明であり、今後の課題として研究を進めたい。

### Abstract

The Chinese long-form vernacular novel "Sanguozhi Tongsu Yanyi (hereafter referred to as "Sanguozhi Yanyi") has been translated and adapted many times since it was introduced to Japan during the Keicho period (1596-1615), with Yoshikawa Eiji's "Sangokushi" (hereafter referred to as Yoshikawa's "Sangokushi") gaining immense popularity. Although the story of the Sanguo primarily focuses on Han nationality, non-Han characters also make appearances. However, previous research on Yoshikawa's "Sangokushi" does not seem to focus on the depiction of these non-Han characters.

Therefore, this paper identifies non-Han characters appearing in both "Sanguozhi Yanyi" and Yoshikawa's "Sangokushi" and conducts a comparative analysis of the characters Meng Huo, Lady Zhurong, and King Mulu. As a result, it was found that 24 non-Han characters appear in "Sanguozhi Yanyi" and 20 in Yoshikawa's "Sangokushi." Additionally, the analysis of character depictions in both works revealed that Yoshikawa's "Sangokushi" adds new

characteristics to the non-Han characters, or sometimes emphasizing the original images in a positive direction. This suggests that Yoshikawa Eiji held a proactive attitude towards non-Han characters. However, the intention behind reconstructing these non-Han characters positively remains unclear and should be pursued in future research.

## はじめに

慶長年間(1596～1615)に日本に伝わった中国の長編白話小説『三国志通俗演義』(以下、『三国志演義』)は、日本で最も人口に膾炙した中国の文学作品の一つである。本作は元禄時代の湖南文山『通俗三国志』をはじめ、数多くの日本人によって翻訳、翻案、そして二次創作されてきたが、その中でも、吉川英治の『三国志』(以下、吉川『三国志』)は屈指の存在と言える。

吉川英治(1892～1962年)は大正・昭和期の大衆小説作家であり、日本では「国民文学作家」として知られている。彼は、『三国志』を執筆し、1939年8月26日から『中外商業新報(現・日本経済新聞)』などで連載を始め、1943年9月5日まで続けていた。吉川英治は『三国志演義』の第一回から第一百五回を十巻に書き上げ、諸葛亮の病没で物語を締めくくったが、その後、「篇外余録」という解説を付け加えた。吉川『三国志』は基本的に『三国志演義』を基にしているが、一部には吉川英治自らの創作も行われており、原作にある描写の割愛、作中人物における人物設定の変更、原作には見られない心理描写の加筆、そして登場人物の創作など、独自の改変が施されている。

『三国志演義』は主に漢族の物語として知られているが、南蛮、羌、鮮卑、烏桓、匈奴など異なる民族も登場している。しかし、吉川『三国志』に関する従来の研究は、曹操、諸葛亮といった主要人物の再創作に焦点を当てており、非漢族人物像の変更について取り組んだ先行研究は、寡聞にして聞かない。そこで、本稿は『三国志演義』と吉川『三国志』における非漢族の人物に焦点を当て、吉川英治がどのように非漢族の人物像を再構築したかを考察してみたい。これにより、吉川『三国志』における非漢族人物像に関する研究の空白を補い、吉川英治が非漢族に対してどのような認識を持っていたかについても示唆を得られると考える。

## 一、『三国志演義』と吉川『三国志』における非漢族人物

『三国志演義』は有名な作品として、実際に読んだことのない人でも、孔明や曹操、劉備などの登場人物を知っていることが少なくないだろう。しかし、非漢族の登場人物は見逃されがちである。三国時代に、魏・蜀・呉の三国が鼎立する中で、非漢族との関わりが描かれ、彼らも頻繁に登場する。『三国志演義』と吉川『三国志』を比較すると、登場する非漢族人物は表1の通りである。

表1 『三国志演義』と吉川『三国志』における非漢族人物

所属	人物	『三国志演義』における登場	吉川『三国志』における登場
烏桓	蹋頓→冒頓 (吉川『三国志』)	第三十三回「曹操引兵取壺關、郭嘉遺計定遼東」	孔明の巻「遼西・遼東」
匈奴	左賢王	第三十三回「曹操引兵取壺關、郭嘉遺計定遼東」、 第七十一回「黃忠斬夏侯淵、趙子龍漢水大戰」	孔明の巻「野に真人あり」、 関南の巻「絶妙好辞」
南蛮	沙摩柯	第八十二回「呉臣趙諮説曹丕、關興斬將救張苞」、 第八十三回「劉先主猇亭大戰、陸遜定計破蜀兵」、 第八十四回「先主夜走白帝城、八陣圖石伏陸遜」、 第八十五回「白帝城先主托孤、曹丕五路下益州」	出師の巻「この一戦」「冬將軍」「石兵八陣」
南蛮	孟獲	第八十五回「白帝城先主托孤、曹丕五路下益州」、 第八十六回「難張温奏宓論天、泛龍舟魏主伐呉」、 第八十七回「孔明興兵征孟獲、諸葛亮一擒孟獲」、 第八十八回「諸葛亮二擒孟獲、諸葛亮三擒孟獲」、 第八十九回「諸葛亮四擒孟獲、諸葛亮五擒孟獲」、 第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「魚紋」「南蛮行」 「南方指掌図」「孟獲」「輸血路」「心縛」「孔明・三擒三放の事」「王風羽扇」「毒泉」「蛮娘の踊り」「女傑」「歩く木獸」「藤甲蛮」「戦車と地雷」「王風万里」
鮮卑	軻比能→鮮卑国王	第八十五回「白帝城先主托孤、曹丕五路下益州」	出師の巻「魚紋」
南蛮	忙牙長	第八十七回「孔明興兵征孟獲、諸葛亮一擒孟獲」、 第八十八回「諸葛亮二擒孟獲、諸葛亮三擒孟獲」	出師の巻「孟獲」「輸血路」「心縛」
南蛮	董荼那→董荼奴 (吉川『三国志』)	第八十七回「孔明興兵征孟獲、諸葛亮一擒孟獲」、 第八十八回「諸葛亮二擒孟獲、諸葛亮三擒孟獲」	出師の巻「南方指掌図」「輸血路」「心縛」「孔明・三擒三放の事」
南蛮	阿会喃	第八十七回「孔明興兵征孟獲、諸葛亮一擒孟獲」、 第八十八回「諸葛亮二擒孟獲、諸葛亮三擒孟獲」	出師の巻「南方指掌図」「輸血路」「心縛」「孔明・三擒三放の事」
南蛮	金環三結→金環結 (吉川『三国志』)	第八十七回「孔明興兵征孟獲、諸葛亮一擒孟獲」	出師の巻「南方指掌図」

南蛮	孟優	第八十八回「諸葛亮二擒孟獲、諸葛亮三擒孟獲」、 第八十九回「諸葛亮四擒孟獲、諸葛亮五擒孟獲」、 第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「孔明・三擒三放の事」「王風羽扇」「毒泉」「蛮娘の踊り」「女傑」「王風万里」
南蛮	孟節	第八十九回「諸葛亮四擒孟獲、諸葛亮五擒孟獲」	出師の巻「蛮娘の踊り」
南蛮	朶思大王 →朶思王 (吉川『三 国志』)	第八十九回「諸葛亮四擒孟獲、諸葛亮五擒孟獲」、 第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「毒泉」「蛮娘の踊り」「女傑」
南蛮	楊鋒	第八十九回「諸葛亮四擒孟獲、諸葛亮五擒孟獲」、 第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「蛮娘の踊り」
南蛮	祝融夫人	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「女傑」「歩く木獸」「王風万里」
南蛮	帶來洞主	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「女傑」「歩く木獸」「藤甲蛮」「王風万里」
南蛮	木鹿大王	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「女傑」「歩く木獸」
南蛮	兀突骨	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	出師の巻「藤甲蛮」「戦車と地雷」
南蛮	土安	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	削除された
南蛮	奚泥	第九十回「諸葛亮六擒孟獲、諸葛亮七擒孟獲」	削除された
羌	徹里吉	第九十四回「孔明大破鐵車兵、司馬懿智擒孟達」	五丈原の巻「西部第二戦線」
羌	越吉	第九十四回「孔明大破鐵車兵、司馬懿智擒孟達」	五丈原の巻「西部第二戦線」
羌	雅丹	第九十四回「孔明大破鐵車兵、司馬懿智擒孟達」	五丈原の巻「西部第二戦線」
羌	迷当大王	第一百九回「姜維計困司馬昭、司馬師廢主立君」	—
羌	俄何燒戈	第一百九回「姜維計困司馬昭、司馬師廢主立君」	—

表1によれば、『三国志演義』には、匈奴、烏桓、鮮卑、羌族、南蛮の五つの非漢族が登場し、その人数は合計24人に上る。ところが、吉川『三国志』は『三国志演義』の第一回から第一百五回までを基に改作されており、迷当大王と俄何燒戈は登場せず、土安、奚泥も削除されているため、非漢族の登場人物は20人となる。また、表1から分かるように、南蛮出身の人物が圧倒的に多い。実は、『三国志演義』と吉川『三国志』において、南蛮出身の人物に関する描写も比較的に多いのである。ただ、『三国志演義』には、六回に及ぶ南蛮関係の七縦七擒<sup>(1)</sup>の物語が描かれており、多くの南蛮の人物が登場するのも言うまでもないだろう。

(1) 七縦七擒【しちしょうしちきん】：敵を七度放して、七度とりこにすること。(諸葛孔明が敵將孟獲(もうかく)をとらえ、とりこにしてから自分の陣形を教えて放してやった。それを七回繰り返した末に、孟獲はついに恐れいり、以後はそむかなかったという故事。

同時に、吉川英治は独自の解釈により、『三国志』の登場人物像を再構築しているが、すべての人物像を再創作しているわけではない。次に、『三国志演義』と吉川『三国志』における蛮王孟獲、祝融夫人、木鹿大王三人のイメージを分析し、吉川『三国志』における非漢族人物像の特徴を考察する。

## 二、『三国志演義』と吉川『三国志』における孟獲像

孟獲は、『三国志演義』の第八十五回から第九十一回に登場する。物語は、南蛮王孟獲が蛮兵10万を率いて蜀を侵犯し、それに対して孔明が蜀軍を率いて南征する場面である。孔明は馬謖などの進言を受け入れ、単に蛮兵を鎮圧するだけでなく、人心を掌握して蜀に取り込もうと考え、孟獲を七度捕らえてその度放免した。最終的に、孟獲は孔明に心服し、部族の人々を連れて帰順した。一方、吉川英治の『三国志』では、『出師の巻』の「南蛮行」から「王風万里」にかけて描かれ、基本的に七縦七擒のストーリーラインに沿っている。以下は、七縦七擒に基づく両作品における孟獲の人物像の分析である。

一擒一縦では、初めて蜀軍と対戦した際、孟獲は「人人毎毎來說諸葛亮善能用兵，善分隊伍，吾尚信之。今觀此陣，旌旗雜亂，隊伍交錯，刀槍器械無一可能勝吾者，始知前日之言謬也。早知如此，吾反多時矣」<sup>(2)</sup>と言った。ここから、孟獲の傲慢さが伺える。二擒二縦では、孟獲は瀘水と築かれた土城を有し、地元の人々が蜀軍に渡河方法を漏らさないと信じ、一日中酒を飲み、軍務に無関心であった。これにより、彼の独り善がりな性格が浮き彫りになる。三擒三縦では、孟獲は孟優に宝物を持って諸葛亮の陣営に投降させ、自らは後で兵を率いて孟優と手を組んで諸葛亮を捕らえようとしたが、見破られて敗北する。ここから、孟獲の勇猛ながら無謀な性格が浮き彫りになる。また、蛮兵の中毒に気づき瀘水へ逃げる際、蛮兵のふりをする蜀軍の掌る小船に乗ろうとして馬岱に捕らえられたことで、深慮に欠ける人物像も現れる。

四擒四縦では、諸葛亮の策略に乗せられた孟獲は、蜀の陣屋に放置された食糧

(2) 訳文：人はみな諸葛亮が用兵の術に長けておるとか申すが、どうだあの陣取りは。旗さし物は乱れて隊伍もばらばらだし、物の具もどれ一つ、わが軍に勝るものはないではないか。人の言うことなぞ、あてにならぬものだ。こんなことと知っておれば、とうに謀反を起こせばよかった。(立間詳介訳、『中国古典文学大系 三国志演義(下)』、平凡社、1972、P233)

と馬車を見て、蜀国に緊急事態が発生して孔明が早く帰還せざるを得ないと判断し、軍を率いて素早く追撃するも大敗を喫する。戦乱の中で逃げる孟獲は再び孔明に出会い、怒りに駆られて直接攻撃しようとするが、仕掛けられた落とし穴に落ちる。ここで、孟獲の衝動的で軽率な性格が浮き彫りになる。五擒五縦では、孟獲は3万の兵を率いて助戦に来ると言う銀冶洞の楊鋒を容易に受け入れたが、宴会で楊鋒の息子に生捕され、孔明に引き渡された。このことで孟獲の軽信さが露呈された。また、六擒六縦では、木鹿大王が蜀軍に敗れた後、孟獲は降伏を装う策略を立てたが、孔明に見破られ、銀坑洞で再び捕らえられた。以前、自らの陣地で捕らえられたら帰服すると約束していたにもかかわらず、今回も従わなかったため、その信用できない性格が浮き彫りとなった。最後に、七縦七擒では、兀突骨が敗れた後、孟獲は蜀軍が蛮兵のふりをして伝えた偽情報を信じ、夜中に兵を引き連れて向かい、罠に落ちて捕らえられた。これにより、孟獲の愚かさや戦略の欠如が一層明確になった。

以上の分析をまとめてみると、『三国志演義』に描写された孟獲は勇猛でありながらも、傲慢で衝動的、軽率かつ無謀で、独り善がり信用できず、人を軽信する性格を持つ人物であることが分かった。同時に、その性格描写は否定的な面が多い。一方、吉川英治の『三国志』における孟獲の人物像はどう描かれているのだろうか。

吉川『三国志』は七縦七擒の話に従って書かれたため、孟獲のイメージは大きく変わっていない。しかし、『三国志演義』と異なる部分も見られる。まず、『三国志演義』では、孟獲の形象について第八十七回と第八十九回の二箇所而言及されている。第八十七回では、孟獲が初めて蜀軍との戦いに登場する場面で、彼は「頭頂嵌寶紫金冠、身披縷絡紅錦袍、腰系碾玉獅子帶、脚穿鷹嘴抹綠靴、騎一匹卷毛赤兔馬、懸兩口松紋鑲寶劍、昂然觀望」<sup>(3)</sup>と描写されている。また、第八十九回では、三度目の放免後に「孔明見孟獲身穿犀皮甲、頭頂朱紅盔、左手挽牌、右手執刀、騎赤毛牛、口中辱罵」<sup>(4)</sup>と記述されている。

(3) 訳文：頭には宝石をちりばめた紫金(赤銅)の冠、身には珠玉の頸飾りに錦の袍、腰には獅子模様の玉帯、足には鷹の嘴を形どった緑色の靴といういでたらで、捲毛の赤兔馬にうちまたがり、宝玉を松葉模様がちりばめた剣を二振り腰に帯びて、昂然と見廻していた。(立間詳介訳、『中国古典文学大系 三国志演義(下)』、平凡社、1972、P233)

(4) 訳文：(孔明は)孟獲のいでたらはと見てやれば、身には犀の皮の鎧をまとい、頭には緋色の兜をかぶり、左手に盾、右手に刀を持って赤毛の牛にうちまたがり口汚くのしりかける。

一方、吉川『三国志』では、これらの場面に加え、孟獲の姿に関する描写がいくつか登場する。例えば、孟獲が初めて蜀軍との戦いに登場する際には、「獅子の如く猛然と、声に応じて駆け寄ってきた」と獅子に喩えられ、敗れて逃走中の孟獲は「さながら美しき猛獣が最期を知るときのように逃げまわった」と描写される。また、二度目の放免後に孟獲が帰る際には、「豹のように、山寨へ駆け登って行った」と書かれている。これらの表現は、孟獲を狂猛な動物に喩えていることが分かる。さらに、初めて蜀軍に捕らえられた際には、孟獲が縄を断ち切るほどの力を持ち、革紐で厳しく縛られ、二十人の力士に囲まれて孔明の本陣に連れられたことが描かれている。これらの描写により、孟獲は獅子や虎のように勇猛で血気盛んな人物として浮き彫りにされている。

次に、四擒四縦の内容について、原作では、諸葛亮が蜀の陣屋に食糧と馬車を放置し、緊急事態を装って孟獲を油断させる策略を使った。孟優がこれを見破り「これは孔明の計ではないか」と孟獲に警告するが、孟獲は追撃し蜀軍に大敗した。一方、吉川『三国志』では、孟獲が狼藉の部屋を見て「孔明は計の多い奴だから、うかと中へ陥るなよ」と戒めた。さらに、蜀軍の攻撃を受けたのは天候の悪化によるもので、追撃中にやむを得ず蜀軍の旧陣屋に泊まることになった。これにより、孟獲の慎重さと戒めを知るイメージが強調され、独り善がりな性格が弱められていると考えられる。

それから、初陣の孟獲は蜀将の王平に出会い、最初に蛮将の忙牙長に王平と対戦させた。忙牙長は王平に敵わず追い詰められた。それを見て孟獲は王平を追撃し、部下の血を見ると本来の蛮人性をあらわしたと吉川『三国志』に記されている。また、「孔明・三擒三放の事」では、孟獲と孟優が共謀し、孟優が百余の蛮兵を連れて諸葛亮の陣営に偽降し、夜に孟獲が蜀の陣営を焼こうとした。しかし、到着時に蛮兵が中毒したことに気づき、「外から火をかけると、中の味方が焼け死んでしまう」<sup>(5)</sup>と言った。これにより、孟獲は部下の苦境と犠牲を重んじる性格が明らかになった。

また、『三国志演義』では、孟獲は他人の計略を受け入れるだけで、自ら策略を考える描写はなかった。しかし、出師の巻「毒泉」の冒頭では、四度目に放免さ

(立間詳介訳、『中国古典文学大系 三国志演義(下)』。平凡社、1972、P242)

(5) 吉川英治、『三国志(七)』。講談社、1991、P365。

れた孟獲が数日間真剣に計略を練る様子が描かれている。孟優にその理由を尋ねられると、孟獲は孔明の計略に敗れたことを悔やみ、今度は自ら孔明に計略を仕掛けたいと答えた。また、三度目の放免後、孟獲は使者を蛮邦八境九十三甸に派遣し、金や宝石で援軍を求めさせた。『三国志演義』では、これは生捕に対する憤怒からとされているが、吉川『三国志』では、孟獲が深く反省し、慎重に再起を図ったと示されている。孟獲は孔明に敗れた経験を活かし、自らの頭脳を駆使して計略を練り、援軍を求める際にも慎重に計画を立てて行動する。これにより、孟獲の戦略的思考と計画性が浮き彫りになっている。

その他、『王風羽扇』では、吉川英治が四度目に捕らえられた孟獲と孔明の会話に、孔明が孟獲を厳しく罵る場面を追加している。孔明の言葉に対し、その日だけは孟獲は何も吼え猛らず、斬られると言われても無言で目を閉じたままだった。しかし、泰然自若として刑の筵に座った孟獲は突然叫び出した。

「孔明、孔明。もしもう一度、俺の縄を解いてくれれば、俺はきっと、五度目に四度の恥を雪いでみせる。死んでもいいが恥知らずといわれては死にきれない。やいっ、やいっ孔明、もう一遍戦えっ」<sup>(6)</sup>

ここから、孟獲が死んでも構わないが、恥を雪ぐためにもう一度孔明と戦いたいという心理が窺える。これにより、『三国志演義』の無頼で恥を知らない孟獲とは異なり、吉川『三国志』の孟獲は恥を知り、自らの名誉を守るための決意と覚悟を持った強い人物として描かれている。

以上のように、吉川英治の『三国志』における孟獲は、勇猛で血気盛んであると同時に、慎重さや戦略的思考を持ち、部下の苦境を重んじる人物として描かれている。また、名誉を重んじ、恥を知る人物としても描かれており、彼の性格には多面的な側面が加えられている。このようにして、吉川英治は孟獲の人物像に積極的なイメージを加え、彼をより立体的で魅力的なキャラクターとして描いている。

総じて、吉川英治の『三国志』における孟獲の描写は、『三国志演義』における彼の性格描写を踏襲しつつも、彼の人間性や成長過程、戦略的思考などを強調す

---

(6) 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991, pp.377-378.

ることで、孟獲をより複雑で魅力的な人物として描き出している。この対照的な描写により、孟獲の人物像はより立体的で、読者に強い印象を与えるものとなっている。

### 三、『三国志演義』と吉川『三国志』における祝融像

祝融夫人は『三国演義』の第九十回に登場する一方、吉川『三国志』では、主に「女傑」という編目に描かれている。上古の火神祝融の末裔として描かれ、丈八の長槍を武器にし、背中に五つの短剣を背負っており、百発百中の腕前を持っている。『三国志演義』では、蜀の兵士が三江を攻め落とした後、孟獲は非常に動揺し、そこで祝融夫人が大笑いして登場し、「男性である以上、知恵がないわけではないか？私は女性だが、あなたのために戦う」と言い、そして彼女は兵士を率いて出陣した。

最初の戦いでは、祝融夫人は馬忠と張嶷と戦った。張嶷は左腕を射抜かれて捕らえられ、馬忠も張嶷を救出しに行く途中で蛮族に捕らえられた。二回目の戦闘では、祝融夫人は趙雲と魏延と戦い、趙雲と魏延は何日もの間戦いを挑んだが、祝融夫人が出陣すると、二人は敗北を装って逃げた。数日間、祝融夫人は罠に遭わないかと思って追跡しなかった。ある日、兵士を引き返そうとしていると、魏延が軍を率いて罵倒し、怒った祝融夫人は追撃し、結果的に馬岱の仕掛けた罠にかかり、蜀の兵士に捕らえられた。その後、孟獲は張嶷と馬忠の二人の蜀将を祝融夫人に引き換えた。

祝融夫人に関する内容を分析すると、まず彼女の勇敢なイメージが浮かび上がる。張競丹(2017)は、『三国志演義』の女性像は、正史『三国志』から受け継がれたものもあれば、作者によって再構築されたものもあると述べている。そして、女性像の再構築には、劉の政権を支持するテーマを強調し作られた女性像のほかに、女性の独特な才能、知恵、美しさ、勇気などを表現して作者の女性観点を強調する女性像や、作品の理想的な色合いを打ち消すために嫉妬や愚かさなどの否定的な特徴を強調する女性像が作られた。そこで、彼女は祝融夫人を「勇」の特性を代表する人物と見なしていると述べている。<sup>(7)</sup>しかも、祝融夫人は馬忠との

(7) 張競丹、「『三国演義』女性形象新論」, 山西大学, 2017, P11.

戦いで馬忠を捕らえ、そして趙雲と魏延との戦いで敵の策略を見抜いていることで、勇氣と計略を持つ女性のイメージが描かれている。

吉川『三国志』において、祝融夫人の人物像は原作に基づいて強調されたものと、追加された新しい要素で構築されていると思われる。まず、戦場にある祝融夫人について、吉川英治は「炎の如く、戦火の中を馳け廻っていた」<sup>(8)</sup>、「その中に炎の飛ぶを見れば必ず祝融夫人のすがたである」<sup>(9)</sup>、「まるで梢の鳥を追いかけているようだ。どうも捕れぬ」<sup>(10)</sup>といったように書いてある。「炎」は情熱的で勢いの激しいイメージであるが、梢の鳥は敏捷な印象を与える。このような描写により、祝融夫人の勇猛さと機敏さが強調されている。また、祝融夫人と馬忠の戦いでは、原作では馬忠の乗馬が絆で転倒したため捕らえられたが、吉川『三国志』では、祝融夫人の短剣がその馬を転倒させ、馬忠が落馬して捕らえられたと描かれている。これにより、この戦いで、蜀将たちは二度も祝融夫人の短剣の攻撃に遭い、祝融夫人の強力な武力が強調された。

さらに、『三国演義』では、祝融夫人が馬忠と張嶷を捕らえた後、二人を殺そうとするが、その理由は明確には述べられていない。しかし、文脈からは、祝融夫人が二人を殺そうとするのは、孟獲が以前に何度も捕らえられたことへの報復であると推測される。一方、吉川『三国志』では、祝融夫人が二人を殺そうとするのは、蛮族の士気を高めるためである。これまでの物語を考えると、蛮兵は何度も蜀軍に敗北し、南蛮族の人さえも南蛮王に背いてしまったため、士気は低下していた。この戦いでついに一勝利を取めたことで、二人の蜀将を討ち取ることは兵士たちの士気を高めることになるのではないか。したがって、ここからも祝融夫人の軍事的な知恵と部族や軍隊の利益を考慮した性格が窺える。

加えて、吉川英治の『三国志』では、祝融夫人に新しいイメージが与えられている。まず、祝融夫人の初登場の姿について、吉川英治は次のように描写している。

「無礼な奴、誰だ？」と一族の者が覗いてみると、孟獲の妻の祝融夫人が、牀に倚って長々と昼寝していたのである。猫のように可愛がって、日頃夫人

(8) 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991, P401.

(9) 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991, pp.402-403.

(10) 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991, P403.

の部屋に飼い馴らされている牡獅子もまた、夫人の腰の辺に頤を乗せて、とろりと睡眼を半ば閉じていた。<sup>(11)</sup>

この場面では、祝融夫人が猫のように可愛らしく描写され、同時に獅子が彼女のそばで眠ることができることと述べられている。これにより、吉川『三国志』における祝融夫人は、可愛らしさと勇敢さを兼ね備えていることが窺える。また、祝融夫人が孟獲と南蛮の一族が蜀軍に対する戦略を議論しているのを聞いた後、祝融夫人は孟獲を「男が蜀の十数万の大軍に打ち勝たなければ、南蛮の王者とは呼べるか」と叱責した。これに対して、一言も発さない孟獲の様子は吉川英治が「細君天下」と表現している。これで、孟獲と祝融夫人の関係では、祝融夫人が主導的な存在であることが明らかになった。南蛮王さえも敬服する女性として、祝融夫人の強気な性格が際立っている。

上記の分析から、吉川英治は新しい表現の追加やプロットの書き換えを通じ、原作に描かれた祝融夫人の性格を強化した。彼女は勇猛さや機敏さ、強力な武力を持つ一方で、軍事的な知恵をもち、部族や軍隊の利益を考慮する性格が強調された。同時に、強気でありながら、可愛らしさと勇敢さを重ね備えた一面も構築された。どちらにせよ、祝融夫人の人物像の再構築は肯定的な方向に向かって行われたと考えられる。

#### 四、『三国志演義』と吉川『三国志』における木鹿大王像

木鹿大王は『三国志演義』の第九十回、吉川『三国志』の「女傑」「歩く木獸」に登場する。彼は八納洞主として描かれ、象に乗り、風雨を操る法术を持ち、虎、豹、狼、毒蛇、悪蝎が従っている。また、三万の神兵を率いる。『三国志演義』では、五度目に孔明に敗れた孟獲が部族と相談し、帶來洞主の推薦で木鹿大王に助けを求めた。数日後、銀坑洞に到着した木鹿大王は孟獲の話聞き、復讐を引き受けた。翌日、木鹿大王は猛獸を連れて趙雲と魏延と戦い、蜀軍は猛獸の狂暴さに苦しめられて大敗した。趙雲と魏延は孔明に報告し、孔明は準備した道具を使うことを決意した。二回目の戦いで、木鹿大王は再び猛獸を率いるが、口から火

(11) 吉川英治、『三国志(七)』、講談社、1991、P400。

を嘖く木獸に遭遇し、猛獸らは進めず、木鹿大王も討たれた。『三国志演義』での木鹿大王は法術を持ち、猛獸を率いて戦う強大な力を持つが、孟獲の頼みを容易に受け入れ、初戦での勝利に驕りを見せた。これにより、助け合いを喜ぶ一方、自信過剰な一面もある人物像が浮かび上がる。

次に、吉川『三国志』における木鹿大王の人物像について論じる。まず、『三国志演義』では、帶來洞主が「私が身をもって頼みに行く」と述べて木鹿大王に援助を求めた。しかし、吉川英治の『三国志』では、「——で久しく、わが蛮都とは対立していたが、こちらから礼をひくうし禮物を具え、蛮界一帯の大難をつぶさに訴えれば、彼も蛮土の人、かならず加勢してくれるにちがいない」<sup>(12)</sup>と帶來洞主が提案した。これにより、木鹿大王が孟獲一族とは長い間対立していたことが分かる。しかし、木鹿大王は帶來洞主の頼みを受け入れ、蛮界の危機を理解し、加勢する用意があることが示される。これにより、木鹿大王の仲間思いの一面が明らかになる。

そして、また、『三国志演義』では、木鹿大王は猛獸を率いて戦う超能力者として描かれる。一方、吉川英治の『三国志』では、猛獸を出戦させる前に呪を念じる場面があり、猛獸たちが戦いに備えて終夜空を望んで咆哮し、一切餌を断って腹を空かせている描写がある。この描写により、木鹿大王の超能力的なイメージが薄れ、戦略や戦術の巧みさが強調される。猛獸たちの欲望や獣性を戦場に持ち込む計画は、木鹿大王の戦闘準備や戦術の一環として描かれている。

更に、『三国志演義』では、孔明が木獸を備えて出戦したことを知り、木鹿大王は自らを無敵と自負し、孟獲と共に兵を率いて出撃した。一方、吉川英治の『三国志』では、前日の勝利に驕る孟獲が木鹿大王と共に陣頭に現れたと描かれている。両作品で驕っている人物は異なり、吉川版では木鹿大王の自負な性格は削除されている。また、『三国志演義』では木鹿大王が自ら戦う場面はないが、吉川英治は彼の戦闘場面を加筆している。二回目の戦いで、木鹿大王は猛獸群を敵軍に嚇け、自らは象鞭と宝刀を手に蜀軍に突撃した。孔明を斬ろうとしたが、関索に討たれる。この場面では、木鹿大王の勇敢さと忠誠心が描かれている。

以上のように、『三国志演義』の木鹿大王は、強大な力と助け合いを喜ぶ性格、自信過剰な一面を持つにもかかわらず、吉川英治の『三国志』では、勇敢で戦術

---

(12) 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991, P397.

に長け、仲間思いの人物として描かれる。吉川英治は加筆や書き直しにより、木鹿大王の人物像を肯定的に改作したといえる。

## おわりに

『三国志演義』は日本に伝わってから、日本人による翻訳や翻案、二次創作が行われてきた。その中でも、昭和時代に独自の創作を加えた吉川英治の『三国志』は特に人気がある。『三国志演義』と吉川『三国志』の両作品には非漢族の人物も登場するが、従来の研究では主に漢族の人物像に焦点が当てられ、非漢族の人物に関する研究はほぼ見られない。そこで、本稿では『三国志演義』と吉川『三国志』に登場する非漢族の人物像を分析し、吉川英治が再構築した非漢族人物像を考察した。これにより、吉川英治の非漢族に対する認識を明らかにするとともに、人物像研究を補足できると考えられる。

まず、本稿では両作品に登場する非漢族の人物を特定した。調査の結果、『三国志演義』には24人の非漢族人物が登場し、吉川『三国志』には20人が登場することが分かった。その中から、蛮王孟獲、祝融夫人、木鹿大王の三人を特定し、彼らの人物像を両作品から分析・考察した。その結果、吉川英治はプロットの書き換えや追加を通じ、非漢族人物に新たなイメージを加えたり、原作の性格を強化したりしていることが明らかになった。具体的には、『三国志演義』では愚かで傲慢な孟獲が描かれているが、吉川英治の『三国志』においては、彼に仲間思いで慎重な面、戦略的思考、恥を知る姿勢、自らの名誉を守る決意が加えられている。祝融夫人は原作の勇猛さや機敏さが強調されつつも、可愛らしさや軍事的謀略の側面も描かれている。木鹿大王は自信過剰なイメージが薄まり、勇敢で戦術的な巧みさ、仲間思いの人物として描かれている。このように、吉川英治の作品では非漢族人物が肯定的に再構築される傾向が見られる。

『三国志演義』における非漢族人物像の構築について、胡進(2013)は、南蛮をはじめとする非漢族のイメージの構築では、漢族は南蛮やほかの非漢族よりも発展しているため、心理的に非漢族に対する優越感を抱いていることが示されると述べている。<sup>(13)</sup>つまり、漢族中心の視点から非漢族を否定的に描くことが多

(13) 胡進、「《三国志演義》中南蛮部落形象の研究——基于“話語・権力”理論的分析」、『青春歲月』。

かった。しかし、吉川英治の『三国志』では非漢族人物が肯定的に再構築されている。これが「民族」との関係があるかについては、今後の課題として考察を進めていきたい。

#### 参考文献

- 吉川英治. 『三国志(七)』. 講談社, 1991。  
[明] 羅貫中撰、沈伯俊・李燁校注. 『三国演義』. 巴蜀書社, 1993。  
立間詳介訳. 『中国古典文学大系 三国志演義(下)』. 平凡社, 1972。  
張競丹. 『《三国演義》女性形象新論』. 山西大学, 2017。  
胡進. 「《三国志演義》中南蛮部落形象的研究——基于“話語-權力”理論的分析」. 『青春歲月』, 2013。